



映画に
宛てた
ラブ
レター

2016・11月号

天見谷行人

男と女 -デジタルリマスター版-

男と女 ーデジタルリマスター版ー

2016年10月31日鑑賞

昔はこんな映画に酔ってたんだね

たとえば、チャップリンの

[「キッド」 \(1921年製作\)](#)

[「街の灯」 \(1931年製作\)](#)

を観てみよう。

そこには、人間が生きることの根源的な悲しさ。そして時に「愛」は、残酷な一面をみせることも描かれる。

しかしチャップリンは、作品の中で「人生を生き抜くこと」の素晴らしさも同時に伝えようとしている。

これらの作品は大昔に作られている。

一年前、テレビで大流行りだった芸人のギャグは、今はもう、誰も笑わない。

そういう21世紀の日本でも、90年前のチャップリン映画は十分面白く、ときに「ワッハッハ」と笑えてしまうのである。

そこにはつまり、人間であればここはこう思う。人間であればここは悲しく思う。

人間であればこのツボを突けば笑う。

というある種の真理。

どんな時代であれ、人間の普遍性というもの是不変に気づかされる。

愛は崇高なものだ。

人間は音楽を愛し、笑いを愛し、そして異性に惹かれる。

愛は時に人間を盲目にさえする。

その逆転パターンがチャップリンの「街の灯」だ。

盲目の貧しい花売り娘は、浮浪者チャーリーを大富豪だと思い込んだ。

チャーリーは彼女に一目惚れし、一念発起、彼女のためにひたすら働く。

その献身的な働きのおかげで、盲目の少女は手術を受けて眼が見えるようになる。

ラストシーン。

彼女の目の前に現れたのは、みすぼらしい浮浪者のチャーリー。

浮浪者は彼女に尋ねる。

「もう、見えるの？」

「ええ、見えます」

一輪の花を手に持ち、彼女の声に、ただ微笑む、浮浪者チャーリー。

映画はここで終わる。

愛はなんと残酷なのだろう。

「眼が開かれる」「現実を見る」ということはなんと残酷なのだろう。

そして愛は、やはり人間が持つ、最も崇高で美しい特質なのだ。

「キッド」や「街の灯」はサイレント映画である。

セリフすらないのだ。

しかし、21世紀の今観ても、やはり「名作」であり、映画芸術の「傑作」であり続ける。

さて前置きが長くなった。

本作「男と女」

公開50年を記念して、デジタルリマスター版での再上映である。

これを観てみたいと思ったのは、五木寛之氏の短編小説集「[雨の日には車をみがいて](#)」（僕はこの初版本を未だに大切に持っている）が大好きだったからだ。



この短編集の最初の方に、映画「男と女」のモチーフが引用されている。

五木氏のファンならご存知だろうが、駆け出しのライターである主人公が、愛すべき車に数々出会い、そこにまた、さまざまな女性が絡んでくるという、お洒落で小粋な作品集である。



1966年。街にビートルズの曲が流れるその年の夏、ほくは一台のオンボロ外車を手に入れた。シムカ1000。風変りな色に塗られたその車に魅せられたほくは、女ともだち^{よっこ}揺子の意外な成功と突然の転落のドラマを乾いた心で見つめていた。

「車は雨の日にこそみがくんだわ」

最後に揺子が残した言葉を忘れられずに、その夏からほくの恋と車の奇妙な遍歴の季節がはじまる。

男は女を愛する。しかし、男の中には、女以上に「クルマ」を愛する人種がいるのである。

本作「男と女」の主人公とヒロインは、カーレーサーと女性脚本家、という設定。

二人は、過去に結婚していて子供までいる。

ただお互いに伴侶を失ってしまった。

やがて二人は恋に落ちる。

この設定からして、まさに絵に描いたような「特権階級」の夢物語映画である。



この作品が作られたのは1966年。

日本公開も同年の10月である。

当時の日本の世情を見てみよう。

テレビでは「ウルトラQ」が放送開始

「サッポロ一番しょうゆ味」が発売開始

そしてビートルズが初来日した年だ。

ちなみに、カーレースでは前年の1965年、日本のホンダがメキシコグランプリで記念すべきF1初優勝を果たしている。

当時のカーレースは、いわば情熱とロマンをエンジンにぶち込んで走っていたようにおもう。

本作でもフォーミュラカーと一般のスポーツカーが、ごちゃまぜで描かれている。

人々のモータースポーツに対する知識、関心はこの程度のものであったのだろう。

本作の劇中テーマ曲はあまりにも有名だ。

さらには、映画の手法として、ぶつ切りの編集。

手持ちカメラの多用。

二人が愛を語り合うシーンでは、あえてモノクロ映像にしている。

色彩のない明暗だけの映像を使うことにより、二人の燃え上がる愛が、どのような色彩を持つのか？

それは観客の自由な想像に任される。

いわば観客は「愛の色彩」を脳内補完するわけである。

待望!! フランスが誇るラブストーリーの不滅の名作が、50年ぶりにデジタル・リマスター版でスクリーンに甦る。

「男と女」が私に平凡な映画は
つくるべからずとの方向を示しました。

今でも常に「男と女」のことを
思っていて、スタジオに入っています。

(BS-TBS「SONG TO SOUL」より)

クロード・ルルーシュ (監督)

「男と女」は魔法のような体験でした。

ルルーシュとバルーがくれた

最高のプレゼントでした。

(BS-TBS「SONG TO SOUL」より)

フランシス・レイ (作曲家)

「一期一会」という

素晴らしい言葉が日本にあるが、

「男と女」はまさに

出会いの芸術であった。

ピエール・バルー (音楽家 / 作詞家 / 俳優)

50年経って素晴らしいのは、
あの時一緒に作った全員が今でも仲が良い事。

私たちは本当に稀な経験を
共にした同士なのです。

アヌーク・エーメ (女優)

僕にとってはまさに永遠のバイブル。

もう言葉では言い尽くせない程、影響を受け、

その後の僕の音楽人生に大きくかかわった映画なのです。

高橋幸宏 (音楽家)



♪ダバダバダ〜♪のメロディで知られるクロード・ルルーシュ監督の「男と女」が、50年の時を超えて鮮やかな映像でよみがえったデジタル・リマスターで初上映。パリで一人暮らしをするアヌとカーレーサーのジャンは、

フランス映画なので、登場する車は当然フランス車だと僕は思っていたが、なんと無骨なフォードのムスタングなのである。

正直これには興ざめた。

ちなみに五木氏の小説「雨の日には車をみがいて」に最初に登場するのは

“たそがれ色”に変色してしまったオンボロ中古車の「シムカ」というフランス車である。別名「走る弁当箱」

1966年当時、駆け出しの放送ライターがマイカーを持つ、ということだけでも奇跡的なことだ。

しかも外見はともかく「フランス車」なのだ。

「恋人と愛を語るには最高の演出だ」と五木氏も作中で語っている。

そして作中の「僕」は、1話目のラストシーンで「男と女」を三回続けて観るのだ。

それほどまでに当時、この作品はある種「時代のアイコン」でもあったのだ。

本作を初めてスクリーンで観て、僕がまず思ったのは、

「ああ、古い」

という印象である。

これはあくまで僕の個人的な主観であることを前もってお断りしておきたい。

映画手法としての

モノクロ映像とカラー映像の対比

手持ちカメラ

ぶつ切り編集

車載カメラ

登場人物のモノローグ

セリフと映像の不一致。

これらの手法は、1966年公開当時、まさに「流行」の最先端。

新しい波「ヌーヴァルヴァーグ」が、フランスから日本に押し寄せた！

と若い観客たちを熱狂させたのだろう。

しかし映画技法が単なる「ファッション」にしか過ぎなかった、という

極めて残念なことが、公開50年を迎えて、改めて僕には感じられたのである。

50年前のファッション作品は恐ろしく古臭く感じる。

しかし、90年前のチャップリン作品には、今なお観る人の心を響かせる、普遍性がある。

わずか数年で賞味期限が切れるような映画作品が、数多く製作される現代、21世紀。

流行という酔いが冷めたとき、22世紀にも鑑賞できる、芸術としての映画作品であるかどうか？

それが、ようやくわかるのではないだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 クロード・ルルーシュ

主演 ジャン＝ルイ・トランティニャン、アヌーク・エーメ

製作 1966年 フランス

上映時間 104分

[「男と女」予告編映像](#)

シーモアさんと、大人のための人生入門

シーモアさんと、大人のための人生入門

2016年11月4日鑑賞

芸術と人生、その「聖性」と「魔力」

辻井伸行さんが優勝した、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール。

ご存知でしょうか？ あの時、優勝者は二人でした。

辻井さんともう一人、中国の若きピアニスト。ハオツェン・チャン。

彼がファイナルステージで弾いたピアノ協奏曲。

その選曲に僕は大いに驚きました。

彼が選んだのはモーツァルトの[ピアノ協奏曲第20番K.466](#)だったのです。

楽曲を聴いてすぐ分かりますね。

音の数が圧倒的に少ない。

それにモーツァルトが活躍した時代、そもそも現代とおなじピアノはまだ現れていなかったのです。

モーツァルトは[61鍵のピアノ](#)を使っていたそうです。

現代のピアノはご承知の通り88鍵。7オクターブの音域が自由に選べます。

しかし[モーツァルト時代のピアノ](#)は5オクターブしかカバーできません。

表現の幅がそれだけ限られるのです。

にもかかわらず、ハオツェン・チャンは、この表現の制約がある、モーツァルトのピアノコンチェルトで「勝負」にでたのです。

なんという大胆さ。

なんという勇氣。

僕が思うに、かれは自分が表現できるピアノの「音色」に圧倒的な自信があったのでしょね。

第二楽章の冒頭のメロディー。

もう一度聴いてみてください。

こんなに易しく、シンプルなメロディー。

おそらく、ピアノを習い始めた小学生でも弾けるでしょう。

それを彼は世界的コンクールという大舞台で「挑戦的」に弾きおおせたのです。

そして彼は辻井さんとともに世界へ羽ばたく切符を手に入れました。

音楽におけるまさに劇的なサクセスストーリー。

ここで一つ問題提起しましょう。

音楽での成功とはなんでしょうか？

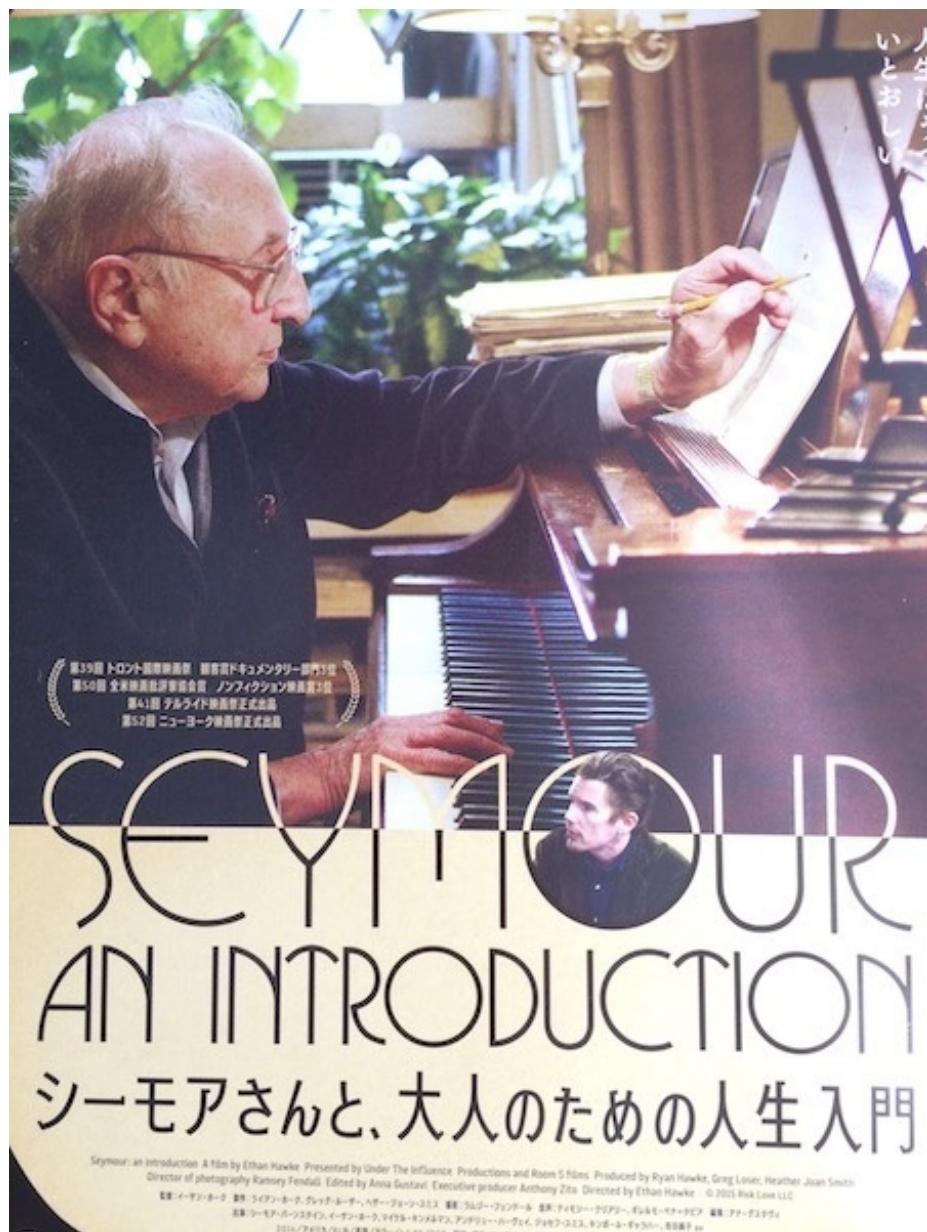
コンサートのチケットが売れること？

音楽ビジネスとして成り立ち、金持ちになること？

それとも芸術性の頂点を目指すこと？

これは両立するのでしょうか。

本作はピアノそのものが大好き、また、ピアノ曲が大好きという方には、大変豊かな体験をもたらしてくれるドキュメンタリー作品です。



ただ、邦題の「人生入門」については、やや疑問符があります。

本作はピアニスト、そして音楽芸術を極めてゆく過程において、芸術家が直面するジレンマについて、シーモアさんが語り部となって、自分の歩んできた人生を振り返り、洞察するというもの

。ピアノという楽器や、その演奏手法についてもかなり突っ込んだ解説がなされます。

したがって、音楽に全く興味のない方、ピアノが好きではない方には、退屈で仕方のない作品に思えてしまうでしょうね。

本作を作ったのは俳優イーサン・ホーク。

すでに俳優としてのキャリアは評価されていました。

しかし彼の言葉を借りれば「実にくだらない演技」を大衆は好み、喜んだのです。

そこに彼は「演じること」その芸術性を極めたい、という欲求が、体の中から湧き出てきたの
でしょう。

彼のなかのモヤモヤは頂点に達しました。

やがて彼は、演劇の舞台に立つことに、極度の不安を覚えることになります。

そんな時に会ったのが、ピアノ教師シーモア・バーンスタインさんでした。

彼は稀有な才能を持ったピアニストであり、賞賛と名声を得ていました。

にもかかわらず、自らステージを去り、一介のピアノ教師という生き方を選びます。

イーサン・ホークは、このシーモア・バーンスタインという人物、その人生に尽きぬ興味と尊敬
の念を覚え、記録にとどめたいと、このドキュメンタリー作品を自ら監督します。

イーサン・ホークにとって、シーモアさんは、まさに「人生の師匠」とでも言える人だったの
です。

僕も「心の師匠」と勝手に思い込んでいる人物がいます。

小澤征爾さんです。

小澤さんのボストン交響楽団時代のドキュメンタリー「[OZAWA](#)」は僕のバイブルとなりました。

心が疲れている時にこのドキュメンタリーはあまりに「眩しい」ものです。

「うつ病」を抱えている僕にとっては、やや調子のいい時に、このドキュメンタリーを見ること
にしています。

それは人間と音楽の関わりが「こんなに楽しいもの」であることを感じさせてくれるのです。

「クラシック音楽は敷居が高くてね……」

と敬遠される方も多いでしょう。

小澤さんが生み出す音楽は本当に良い意味で敷居が低いのです。

たしか1980年代に、小澤さんの特集番組が民放で放送されたことがあります。

その中で、実に心憎い演出がありました。

当時デビューして間もないアイドル、野村義男君と、小澤さんが、屋台のおでん屋で、音楽につ
いて語り合う、というシーン。

これは小澤さんの音楽を理解する上で、実に的を得た演出でした。

こんなに「屋台の似合う」クラシック音楽の指揮者がいるのでしょうか？

世界を探してもそれは小澤さんだけでしょう。

その小澤さんが、世界の頂点に君臨するオーケストラ

ベルリンフィルを率いて演奏したチャイコフスキーの「くるみ割り人形」

そのなかの「[花のワルツ](#)」

なんとという愛らしさ。美しさ。クラシック音楽が決して限られた特権階級の音楽ではないことを
示してくれます。

本作はいろんな問題提起を僕たち観客に投げかけてきます。

芸術とは何か？

芸術と一般大衆との乖離について。

芸術と芸術家はどうか生きるべきか？

さらには、芸術は人間を本当に幸せにするのか？

これは、大変シリアスな問題ですね。

たとえば「最高の音楽を目指そう」というアーティストは、世界中にゴロゴロいます。

それはクラシックに限りません。

大衆音楽でもそうです。

その代表格は今は亡き、マイケル・ジャクソンでしょう。

映画「[THIS IS IT](#)」

を見れば分かります。

彼は「キング・オブ・ポップス」と呼ばれました。

まさに王者として、つねに頂点に、居続けなければならない。

そのプレッシャーと戦う姿は、ある種痛ましささえ感じられるのです。

その結果、彼の生涯は悲劇的な結末を迎えました。

音楽が彼を死に追いやった、とさえ言えるのかもしれませんが。

本作でも語られるように

あまりに音楽の芸術性を追求するあまり、グレン・グールドのように、自分の殻に閉じこもるように、神秘的な存在になってしまった人もいます。

彼は後年、人前でリサイタルをすることをやめてしまいました。

以前テレビで彼のインタビューを目にしました。

「私が人前で演奏しないのは、すべての人に、私の音楽が”等しく”聴かれることを願っているからです」

グールドは、コンサートでは人々は座る席によって、音の響きが違って来る「それが嫌だから演奏しない」というのです。

しかし、いくらレコードでグールドが奏でる音楽を「共通体験」しようと試みたとしても「再生装置」である、オーディオ機器は、各家庭において違いがあります。

数万円のものから、マニアが購入する数百万円のものまで。

当然音質も変わってきます。

それを考慮すると、グールドの主張はどうにも”あやふや”です。

本作でのシーモアさんは、グールドのこともよく知っていました。

「いい演奏をしたいと願うアーティストは例外なく、客の前で緊張します。グールドは極度の緊張に耐えきれなかったのです」

さて、こんな芸術と人間との関わり。

芸術は人間が生み出した美しい側面ではあります。

しかし「美の探求」という側面もあります。



じぶんの心と向き合うこと、
シンプルに生きること、
成功したい気持ちを手放すこと。
積み重ねることで、人生は充実する。

シーモア・バーンスタイン

悲しみの音色はいずれ、
美しいハーモニーになる。

人生の折り返し地点—アーティストとして、一人の人間として
行き詰まりを感じていたイーサン・ホークは、ある夕食会で当時
84歳のピアノ教師、シーモア・バーンスタインと出会う。たちまち
安心感に包まれ、シーモアと彼のピアノに魅了されたイーサンは、
彼のドキュメンタリー映画を撮ろうと決める。

シーモアは、50歳でコンサート・ピアニストとしての活動に終止符を打ち、
以後の人生を「教える」ことに捧げてきた。ピアニストとしての成功、朝鮮戦
争従軍中のつらい記憶、そして、演奏会によつわる不安や恐怖の思い出。決して
平坦ではなかった人生を、シーモアは美しいピアノの調べとともに語る。彼のあたたかく
繊細な言葉は、すべてを包み込むように、私たちの心を豊かな場所へと導いてくれる。

イーサン・ホーク監督作、
89歳のピアノ教師が教える、
人生のうつくしさ。

それは物理学や数学の法則が、それを学ぶ者にとっては「とてつもなく美しい」と感じることに
同じです。

「 $E=mc^2$ 」というアインシュタインの方程式は、シンプルで素人目にも調和と美しさを感じます
。

しかし、この美しさを持った方程式を利用すれば、おそろべきエネルギーを持った兵器を作るこ
とも可能です。

「永遠の真理」は地球を木っ端微塵に破壊する可能性さえ内包する、冷酷さを持ち合わせてい
ます。

「永遠の美や真理」は人間にはしよせん「扱いきれない」もの、なのかもしれません。

だから人間はいつまでも「美や真理」の前では子供なのでしょう。

間違った使い方をして愚かなままで、何も学ぼうとしません。

そして過ちを繰り返す。

失敗を再生産してゆく。

本作は、見る人により、様々な印象、感想を持つことでしょう。

自分の人生をよりよく生きること。

自分の生を全うすること。

人生における成功、現世における成功と、芸術的成功は両立するのか？

ジャンルは違いますが、一つの分野において頂点を極めようとする人たちのドキュメンタリーとして

[「二郎は鯨の夢を見る」](#)

[「鬼に訊け 宮大工 西岡常一の遺言」](#)

などもご参考までに上げておきましょう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 イーサン・ホーク

主演 シーモア・バーンスタイン、イーサン・ホーク

製作 2014年 アメリカ

上映時間 81分

[「シーモアさんと大人のための人生入門」予告編](#)

グッドモーニングショー

グッドモーニングショー

2016年10月11日鑑賞

爆弾と視聴率とエンタメの関係？

最初はねえ～、これスルーしようかな、と思ってたんですよ。

でも観て正解でした。お金払った分は、ちゃんと「おもしろい！！」という作品に仕上がります。

本作は映画の初めから、時間軸がリアルタイムで進行する、というのが大きな特徴です。

ほとんど回想シーンなどを挟まず、まさに今、目の前で起こっている分、秒、単位の時間、ワンカット、ワンカットが極めてスリリングな効果を生み出しています。

主人公はニュースキャスター、澄田真吾（中井貴一）

相方の女性キャスターに小川圭子（長澤まさみ）

彼女の失恋を慰めようとした澄田のちょっとした優しさ。そこにつけ込んだ圭子。実は肉食系女子なのです。澄田と、まんまと男女の関係を作ってしまった、という設定からお話は始まります。



今朝もいつも通り、ニュースワイドショー番組の司会を務める二人。

最近、視聴率の落ちを気にしているのは、スタジオの奥で腕組みしているプロデューサー、石山（時任三郎）

本作、いい俳優さん使ってるんですねえ。

きっと俳優さんたちのギャラは、高かついたんだろうと思います。

ただ、作品全体の予算としては、そこそこリーズナブルに作られたのではないかと推測します

。

本作の面白さにどんどんはまり込んで行きながら、片方で僕は、やや冷静に

「これは低予算でも、おもしろい映画が作れる格好の見本だ！」

という思いを強く感じていたのです。

映画にとって予算は極めて重要な要素です。

例えば「時代劇を作ろう！」と監督、プロデューサーが決めた時点で、内容はともかく「金のかかる映画」を覚悟しなければなりません。

対照的に「これだけしか予算がない」

という場合、答えは簡単です。

①現代劇にする

②ロケはなるべくやらない、できれば室内劇にする。

③登場人物を少なく、エキストラをなるべく使わない。

④有名俳優を使わない

本作では知名度の高い、有名俳優を”止むを得ず”使ってます。

これは宣伝広告、興行収入を睨んで、費用対効果を狙ったものであることは言うまでもありません。

本作の舞台が「ワイドショー番組のスタジオである」と言う点も見逃せませんね。

ちなみに制作はフジテレビ。

なんのことはない、本作で使う舞台装置や機材は、すでに「ぜんぶ揃っている」わけです。新たに機材を買う費用もいらない。

なお、低予算で大ヒットを飛ばした映画の例があります。

矢口史靖監督の

[「ウォーターボーイズ」](#)

[「スウィングガールズ」](#)

などが格好の例でしょう。

登場人物を演じたのは、当時、全く無名俳優であった、妻夫木聡、玉木宏、上野樹里、貫地谷しほり、と言った人たち。

彼らは、これらの出演作で広く世に知られるようになりましたね。

ちなみに「スウィングガールズ」については予算5億ぐらいで、21・5億円を稼ぎ出す大ヒットとなったそうです。

さて、本作に戻りましょう。

朝のニュース番組の進行中、突然速報が入ります。

立てこもり事件発生！

人質は数人。

犯人は銃と爆弾を持っている。

更には犯人の要求が、なんと

「ニュースキャスター、澄田真一、本人をここに連れてこい！！」

警察の物々しい警護の元、澄田は犯人の立てこもり現場へ向かいます。

このとき、番組スタッフやプロデューサーたちにとっては、まさに「独占スクープ」

こんなに「美味しい」ことはありません。

全国のお茶の間の視線を独占できる。

視聴率が稼げる！！

番組スタッフは、澄田の防弾及び特殊「防爆」スーツ（ちなみにアカデミー賞を獲った[「ハートロッカー」](#)

で主人公が着るやつです）に、こっそりカメラを仕込みます。

キャスター澄田と、犯人の緊迫したやりとりが、生中継できる！！

心の中はまさに狂喜乱舞状態のスタッフたち。

当のニュースキャスター澄田は、身の危険に怯えながら、犯人の説得を試みるのですが.....。

＼落ち目のキャスター 人生サイアクの日！／

トホホなキャスター
ふっこび女子アナ
Why?
キラメキ新人アナ
のらびらりプロデューサー
ワケあり立てこもり犯
淨たい妻
コワモテ警察特捜班
テレビのチーフディレクター
熱血 報道担当
ヘテラン特捜班
男勝り美少女グルメ担当
メカオタク中継担当

前代未聞の生放送が、今始まる！

放送作家、脚本家としてテレビを知り尽くした
若塚良一監督(『踊る大捜査線』シリーズ)が最新作の題材に選んだのは、
朝の情報番組である“ワイドショー”。

報道、スポーツ、芸能、さらにファッション、グルメに人気動画まで、
視聴者が興味を持つものなら何でもネタにする。
そんなワイドショーの顔であるキャスター澄田真吾が本作の主人公。

本作は、この落ち目のキャスターが陥る
災難だらけの一日を通った抱負絶頂のストーリー。
“生放送”という時間的な制約の中で番組作りに奮闘する
テレビマンの姿を、真実に、滑稽に、そして愛情を持って描きます！
その語り口は緻密で巧みでありながらも大胆な展開を見せ、
やがて大きな笑いと感動に包まれる。
そんな笑撃必至のエンターテインメント映画の誕生です！

STORY

澄田真吾は、朝のワイドショー「グッドモーニングショー」のメインキャスター、かつて報道番組のエースキャスターだったが、同期入社のプロデューサー石山聡に替われ今に至っている。

ある日、いつものように深夜3時に起床した澄田は、妻子と妻の言い争いに巻き込まれる。逃げるようにテレビ局に向かう途中、今度はサブキャスターの小川美子から、二人の交際を今日の生放送で発表しようとする。さらに

石山Pからは番組の打ち切りが告げられ、踏んだり蹴ったりの事態に困惑していた。

そんな時、都内のカフェに就を持った男が人質を取って立てこもっているという連絡が飛び込んできた。芸能ゴシップや政治汚職、行列スイーツ特集を押し付け、立てこもり事件をトップのネタに番組はスタートするが、その後、警察からとんでもない知らせが入る。なんと、犯人の要求は「キャスターの澄田を呼べ」というものだった——。前代未聞の生放送が、今始まる！

まあ、テレビ局にとってみれば、キャスターひとり、事件で殺されたところで、視聴率が稼げ、スポンサーが喜ばば「言うことなし」なのです。

もし万が一、キャスター死亡、なんてことになったら、それこそしばらくは、ワイドショーや特集番組で、またバンバン視聴率が稼げるわけです。

危険な場所へ向かわせたのは警察とテレビ局ではありますが、犯人の要求であり、なにより、キャスター澄田、本人も了解済みなんですね。

合法的な人殺しシーンが取れるなら、それさえも「エンターテインメント」になってしまう。

本作中に「テレビの報道なんて、しょせんエンタメなんだよ」という趣旨のセリフがあります。

本作を象徴する一言でしょう。

報道はテレビ局にとって「商品」の一つに過ぎない。

僕たち一般市民は、常日頃から、こういった「加工済み情報」に、ある種、飼いならされている

かのようにです。

食品添加物なしでは、もう美味しいと感じない料理と同じでしょう。

メディアの情報に飼いならされた僕たちの日常。

市民の世論や感情、何より、正義と真実は「分かりやすいはずである」と、思い込まされていること。

そして、お茶の間で他人事のエンタメとして報道を楽しむ「一般市民の欺瞞」さえも、本作は炙り出して見せているかのよう。

表面は薄っぺらいエンタメ作品を「あえて」装いつつ、実はかなり深掘りできる作品だと僕は思いますよ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 君塚良一

主演 中井貴一、長澤まさみ、時任三郎、濱田岳

製作 2016年

上映時間 104分

[「グッドモーニングショー」予告編映像](#)

SCOOP!

SCOOP!

2016年10月24日鑑賞

ゴギブリとドブネズミ、以下の「美学」

「福山がスキャンダルな役をやるらしい」と言う印象しかなかった本作。

当初観る予定もなかった。

しかし監督の名前を知って観てみようと思った。

「モテキ」「バクマン。」を撮った大根仁氏である。

それほどまでに、この二つの作品は抜群に「面白カット」なのだ。

本作では福山雅治が、ダーティーでワイルドな「中年パパラッチ」を演じる。



その意外性と、テンポの良いストーリーに引き込まれる作品に仕上がっている。

福山演じる主人公「都城静」は、芸能人、タレントなど有名人を盗撮するのが仕事だ。

かつては出版社に勤めていたが、今はフリーでやっている。

組織の「しがらみ」から外れた、まさにアウトローであり、一匹狼。

彼の車は**ベンツのゲレンデワゴン**である。

新車だと軽く1000万を超える車だ。

「結構儲けてやがるなあ〜」と思っていたら、実は中古で買っていたのだ。

フリーカメラマンの暮らしは楽じゃない。

彼の場合、一般ピープルが、覗き見したくなるような、著名人を狙う。

夜の闇に紛れ、獲物の行方をどこまでも付け狙い、追いかける。

その姿はまさにハイエナである。

やがて彼のカメラが決定的瞬間をゲットする。



「カシャッ、パシャッパシャッ！！」

次に彼がとる行動はただ1つ。

逃げて逃げて逃げまくるのだ。

「獲物達」は反撃してくる場合があるのだ。そういう危機的な状況に陥った都城を助けてくれる、変なおじさんがいる。

名前を「チャラ源」という。

この闇夜の時空間に、ふわふわ漂っている「クラゲのような」得体の知れない人物を、演じられるのはこの人。

リリー・フランキーだけであろう。

このキャスティングは大正解。この人の演技にはいつも驚かされる。

本作でもかなり衝撃的なシーンがあるのでお見逃しなく。

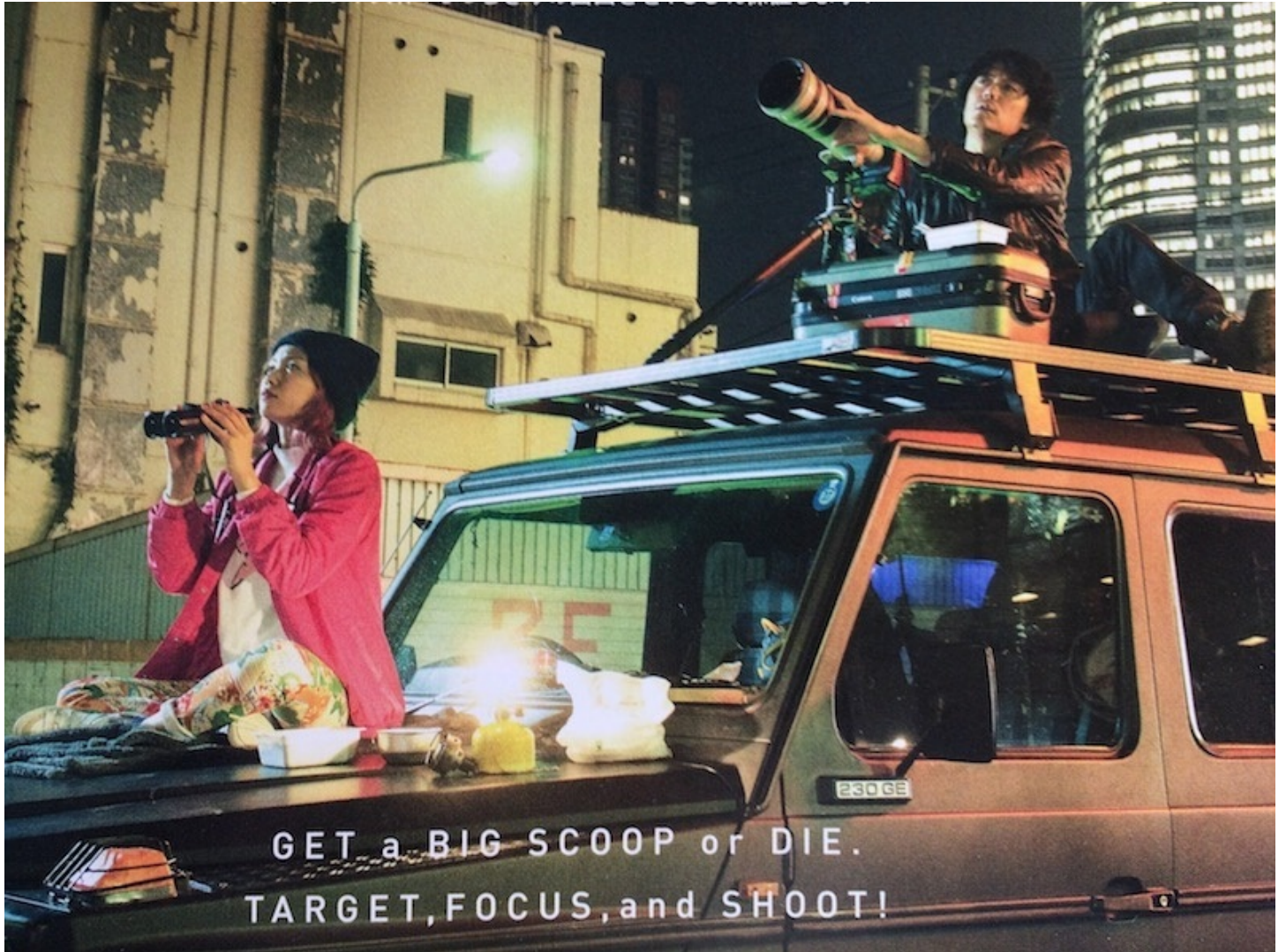
さてこういう、ヤサグれた”汚ったねえ〜”現場に配属されてきたのが、二階堂ふみ演じる”ウブな”新人女性記者「行川野火」

写真週刊誌の「イロハ」も、まるでわからない”ど素人”だ。

「なんでこんな奴と組ませるんだよ！」と都城静は、やり手女性編集者（吉田羊）に悪態をつく

のだが...

彼は、この”ど素人”女性記者を車に乗せ、今日も獲物を求め、夜の街に紛れ込んでゆく。



彼の仕事の99%は「待つこと」に費やされる。

24時間、狙った獲物を待ち続けても、23時間59分、何も起こらないのが当たり前なのだ。

しかしこの道のプロ、都城静は、その「残りの1分」「シャッターチャンス」に全てを賭ける。

そうやって彼は有名人達のアラレもない、恥ずかしい姿を「SCOOP!」として次々、モノにしてきた。

彼の写真を「商品」にし「現ナマ」に変えるのは写真週刊誌だ。

編集部では、毎号、発売部数がホワイトボードに表示される。

都城静と行川野火のチームは、どんどんスクープをモノにしていく。

刺激的な写真を撮れば撮るほど、発行部数は右肩上がりで、増えてゆく。

まさに「イケイケドンドン」

その発行部数の伸びを横目に見ながら、都城静は、ぼそっと野火につぶやく。

「俺たちがやってる事は、しょせん、ゴキブリか、ドブねずみ以下さ」

しかし、ゴキブリだって、ドブネズミだって、なりたくてその姿に生まれついたのではない。

彼らにも彼らなりの美学があってもいいではないか？

今日も彼らは真夜中の闇に紛れ、こそこそと街の片隅に自らの姿を潜める。

「SCOOP! を撮る」

ただそれだけに、全てを賭ける、彼らの生き様。

ラストシーン。漆黒の夜空。

ぽっかり浮かぶ満月。

月はどんな表情で彼らを観ているのだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 大根仁

主演 福山雅治、二階堂ふみ、リリーフランキー、吉田羊

製作 2016年

上映時間 120分

[「SCOOP!」予告編映像](#)

2016・11月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/110823>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110823>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト